

大学放浪記 (29)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では最近の嬉しいニュースを記しておく。チェンマイ大学に招聘して頂き、赴任してから、タイの大学での居候は約15年が過ぎ、有り難いことに現在もマエジョ大学で御厄介になっている。必ずしも毎日が、楽しい日々ではないし、愚痴やフラストレーションも溜まり、不安に思う事もしばしばである。だからと言ってこの「会員の活動」欄をストレスのはけ口に使用したりする積もりはない。70才を過ぎれば幸福に対する考え方のアプローチを変える必要があると言う仏教関係者の有り難い話を聞いたことがある。それによると幸せを感じるのはどういう場合かという、1) 目指す目標を達成したときの達成感を感じる時、2) 普段当たり前に想っていたことが、突然できなくなったときに感じる当たり前の日常生活、たとえば毎日水道のコックをひねれば想うだけ水が出て飲む事が出来るが、地震や火事で停電になったとき、これまでの生活が余りにも当たり前でないことに気付いたとき、とある。しかし加齢と共に幸せを感じる対象へのアプローチを変える必要性を説いている。それは自分が生きた人生で得たものを次世代に伝える幸福感を持つべきであると言う。上記2つは、どちらかと言えば、むしろ個人的な幸福感と言う感じであるが3番目は自分の事ではなく、他人、社会への寄与、貢献と言う点でいくらか異なる。筆者はそれが自分に与えられた人生に於けるミッションを探すと言う行為に相当する。在職中は家族を養い、子供の教育を考え、収入も生活を優先して考えなければならない。さも無ければ、自らが望む十分なレベルの生活は不可能であり、また苦しいが我慢に耐え、多少の不満も押し殺し、妥協して生きることになり、余裕のある生活を送ることは難しい。しかし70才を超えるとそうしことを考える必要がなくなる。もちろん子孫のためにお金や財産を残したいと言う人も居るが、家族や親戚など、私的な関係者、或いはグループにとどまるが、やはり他人、社会、世界など広く公的な貢献を幸せと考える考え方にシフトすべきと説いている。すなわちこの事は一職を終えたらもっと社会貢献に力を入れろと言うことである。そしてこのことは義務ではないが、これまで生きてきた人生の中で決して自分一人で生きてこられたと思うな、これまでお世話になった人々や社会への感謝の意志表示と返礼と考えろ、と解すればそれほどの抵抗感はない。儲けた金を墓場まで持って行ける訳でもないのだから、その有効利用の意味でも心しておくべきと認識して居る。そう考えると極めて気楽に成り、他人の喜び事にころから祝福を送る心境になれる。これは「愛」に似て、決して見返りを求めない、むしろ与えることが嬉しく、楽しいという感覚である。

自分では何が為に、この地に、またこの時代に、生を受けて生まれてきたのか、また何故いまこの地にいるのかなどを考える事もしばしばある。数年前から人生とは「自分のミ

ミッションを捜し求める目的地のない旅」と位置づけている。したがって、何時そのミッションを見つけるか、或いは見つかるかは分からない。ひたすら暗中模索の難しい旅で有り、果たして自らが果たすべきミッションを正しく見つけたのかどうかの確認も難しい。それは「評価は常に自分がするのではなく、他人である」からである。如何にその努力が多大であってもそれが不特定多数の他人により評価を受けない限り意味はない。また高い評価を得るために努力をするのではなく、他人のため、社会のため、と思いつつ努力した結果が当初の初志に沿っているからこそ、評価される確立が高いとも言える。何を何処までやればどれだけの高い評価を受けることができるかと言うことは必ずしも正しくない。一応の対応をする中でその方法などに於ける一時的な、あるいは短期的な目標ではあっても最終目的ではない。何をしておかねばならないとか、何をすべきか等は、何時何処でその情報、知識、経験が効力を発揮するかは予め予測はできない。できたとしてもそれはあくまでもぼんやりとした物であり、明確に示される物では無い。あのときこの事を勉強して置けば良かったとか、そんなことならもっとやっておけば良かったと後悔することもあるのも明確な行動予測が設定できないからである。

本報では、筆者がチェンマイ大学に招聘され、就任したときに既にチェンマイ大学の助教授であった教員の一人が、大学の首脳陣（学長体制）の任期満了に伴い、新しい人事の布陣が敷かれたという。そのなかで少なくとも筆者が知る2人が一人はフル・プロフェッサー (Full professor) に昇格、他の一人が学長補佐 (Assistant to President) に任命されたと言うので、早速ウェブサイトを確認し、お祝いのメッセージを送った。早速教授に昇格した教員からビデオ・コールの電話があり15分ほど話をした。相手からはメッセージへの返礼と共に、本人が現在属する学科で初めての教授になったこと、また筆者が赴任当時におそらく10編に近い論文を「見て欲しい」と依頼され、若干専門は異なるが引き受けたことがある。その最初の論文が閲読を通過し、無事に受理され、学術誌に公刊されることになった。今回の昇格時にも、この論文が高い評価を受けたと言う思い出話も彼の昇格に花を添えた。筆者自身も非常に嬉しかったし、幸福感を覚えた。素直に、また積極的に他人の幸せを祝い、分かち合える自分自身にも感謝した。これまでも既述してきたがタイの大学では教授になるのは極めて稀であり、学部でも教授は数えるほどしかない、それだけに教授のランクにある教員が少ない中での快挙であり、また学科始まって以来の初めての教授誕生と言うこともあって、大変めでたく嬉しい限りである。筆者は大学レベルの研究業務センターで、その教員がダイレクターの任期の間にアドバイザーというステータスでお世話になった。新学長の体制の組閣で、どうみても政治的とも想われる大学のニュー・ポリシー(?)で彼はダイレクターの席を解任され、その3週間後に筆者もお払い箱になった。あまりにも急なことでもあり、咄嗟に新たな職を探す余裕はない。招聘して頂いた元学部長(元副学長でもある)の計らいで機械工学科から別の学科に移籍して面倒を見て頂いた。今回昇格した教員はダイレクターを解任のあと直ぐに別の機関の長として今日に至った訳である。彼のダイレクター在任中は日本の大学との学術交流事業に2回ほど

参加する機会を頂いた。また別の機関と三重県とのつながりからも2度ほど日本に行くことができたが、公務である事から自宅には立ち寄らず、家内に必要品を宿舎に届けて貰ってタイに戻ったこともある。とにかく公務優先だから当然の対応である。

その後チェンマイ大学での学部長の任期満了で移動せざるを得なくなり、コンケン大学にお世話になった。基本的に外国人のタイの大学での契約期間は1年で有り、翌年コンケン大学を離れて現在のマエジョ大学に移ったと言う表現より、むしろ受け入れて頂いたというべきであろう。その教員の教授昇格は、90%以上は基本的にその教員の努力が招いた成果への高評価に全面的に依るものであるが、わざわざ昇格のニュースへの感謝の意志表示が嬉しい。これこそかねてより口にしているように、金では買えない人生の財産である。この表現は、筆者にとってこうした教員の昇格、存在はこれまでの長い付き合いの関係から、筆者にとって財産であるが、筆者自身が何を為たかと言うことを誇りにする事はあっても自慢をするつもりはない。次世代に夢を託すという虚心坦懐な思いである。もう一人の教員は、筆者が日本の大学での在職時代からよく知る関係にある人物である。付属施設の「長」であるダイレクターの席にながらく座し、企業との共同研究や新機軸の研究プロジェクトの立ち上げなどに辣腕を振るってきた。その実績とキャリアが買われて今回の副学長の席を手に入れたと言えよう。何処までその能力を伸ばし、また発揮できるかはこれからの活躍を見ないと分からないが、多くの人々が彼には大きな期待をして居ることに変わりはないし、期待通りの成果を視ることが出来ると確信している。残りの一人は日本の大学で博士号を取得する前から知っている間柄である。学位を取得して母国に帰国後、付属施設の役職につきダイレクターのもとで仕えてきた。学長補佐としての更なる活躍は未知数であるが、これまでの経験を生かして大学の発展に尽力して貰いたいものである。ただひとつ管理職の座に就いた彼らに望むことがある。それはアカデミックな実績、業績をコンスタントに維持して欲しい。研究職を歩む教授が最高のランクであるならば、やはりパブリケーションがコンスタントに継続して学術誌に掲載、公刊される必要がある。また管理職としての戦略やプロジェクトに関する論文でも良い。必ずしも本来の専門分野でなくても良い。いや、むしろそうした論文がある事の方が管理運営(Administration)の道を歩む人間にとっては重要かとも考える。管理運営が専門であると言う証明にもなる。久々のホット・ニュース(Hot news)に本当の幸せを感じた気分でもある。またこのような財産は消えないし、考えや信条は末長く伝承される。70才からの幸福感へのアプローチを変える、と言う上記の心境にいくらかでお近づき事ができ、仏教の教えに少しでも近づいた思いでもある。まさに「人生楽しからずや」である。良かった、良かった。本当に良かった。

<余録>

ここで敢えて大学の教員が生きる道について再度資料として既述しておく。タイの大学のシステムは米国のそれに類似しており、いずれかの次点で研究職として生きるか、管理

運営職で生きるかに分かれる。米国の場合は学術的業績が評価されて管理運営の道を選んだ場合でも既に教授である場合が殆どであるが、タイでは学長、副学長、付属研究所の所長、学部長というような要職であっても必ずしも教授のランクでなくても良く、管理運営能力が優れていれば教授でなくても問題は無いと言う基準であるから、少々状況が異なる。管理運営職を選ぶと、それ以後もその道を変えることは難しい。研究職に戻るには公刊された論文数が評価対象になるから管理運営職の教員も学術論文に基づく評価を受けなければならない。一度研究を離れると研究論文をコンスタントに書いて投稿、受理、掲載される事は極めて難しくなる。筆者は、「それならば、管理運営に関する論文を書けばよいのではないか」と言いたいのである。むしろ、そうする対応こそが自分の専門をより明確にする事が出来るし、その専門家ということになる。極端な話になるが、管理運営における戦略、政策、プロジェクトに関する論文や提案が研究職における学術活動に匹敵するものとする。できればそうした論文が評価され教授のポストへの機会が開ければ、それはそれで評価されるべきではないか。